

## 【研究報告】

## 自己教育力の基礎看護学実習前後の変化と学年別特徴

山本 美紀      ニッ森栄子

## 【要 旨】

N看護大学のA・B・C学年の延べ897名を対象に、基礎看護学実習前後の自己教育力を、梶田の「自己教育力調査項目」を用いて調査した。その結果、次のことが明らかになった。1. 基礎看護学実習前後の自己教育力は、学年によって異なる変化を示した。2. 実習後に有意差のあった項目では、梶田の3つの側面から「自信・プライド・安定感」に関する項目が多かった。3. 自己教育力の3つの側面からは、「成長・発達への志向」が高く、「自信・プライド・安定感」が低い傾向にあり、看護学生の特徴を表していた。実習前後の変化では「自信・プライド・安定感」に有意差が認められた。また、得点変化は、学年別に異なる特徴がみられた。4. 自己教育力を高めるためには、学年別の特徴を把握し、学生の潜在能力を引き出す働きかけが必要であることが示唆された。

【キーワード】 自己教育力、基礎看護学実習、看護学生

## I. はじめに

看護基礎教育では、1990年の看護教育課程改正時に自己教育力の育成が強調され、さらに2003年の『新たな看護のあり方に関する検討会報告書』<sup>1)</sup>においても再度提言されており、自己教育力の重要性は認識されている。

自己教育力とは、稲川<sup>2)</sup>によると『『自分が』『自分を』教育し、『自分で』『自分を』教育する力である』と述べられている。さらに梶田<sup>3)</sup>は、自己教育力を4つの側面で構造化し、Ⅲ. 学習の技能と基盤を除いた他の3つの側面から自己教育力を観察する調査項目を作成している。その側面は、Ⅰ. 成長・発達への志向（達成・向上の意欲、目標の感覚と意識）、Ⅱ. 自己の対象化と統制（自己の認識と評価の力）、Ⅳ. 自信・プライド・安定感である。

看護は実践の科学であり、看護基礎教育においては臨地実習によって実践力を培っていく。実習体験は、学生が自己を見つめ、自己の能力を活用しながら問題解決に必要な能力を修得していく。すなわち、臨地実習は看護実践能力の育成とともに自己教育力の育成と

しても重要な意味をもつ<sup>4)</sup>。

自己教育力に関する研究は、1990年以降年々増加傾向にあり、その多くは看護学生と看護師を対象にしたものである<sup>5)</sup>。学生を対象したものでは、大学生と短大生あるいは専門学校生との比較<sup>6) 7)</sup>や学年の進行による変化<sup>7)</sup>、さらには自己教育力に関連する要因として、看護イメージ<sup>8)</sup>や挫折感<sup>9)</sup>、劣等感<sup>10)</sup>さらに学習方法<sup>11)</sup>との関連が報告されている。実習に関しては、臨地実習が自己教育力の育成に関与していると言われて<sup>12)</sup>が、実習前後における自己教育力の変化についての報告は少なく、学年を比較検討したものはみあたらない。

そこで本研究では、自己教育力の基礎看護学実習前後における変化を明らかにし、学年別の特徴を検討した。

## II. 研究方法

## 1. 調査対象

N看護大学1999年入学生108名、2000年入学生110名、2001年入学生110名を対象とした。

表1 「自己教育力調査項目」

側面	下 位 項 目
Ⅰ 成長・発達への志向	5 他の人から尊敬される人間になりたい
	8 自分の能力を最大限生かすよう努力したい
	9 認められなくても自分の目標に向かって努力したい
	10 自分でなければやれないことをやってみたい
	11 自分がやり始めたことは最後までやってみたい
	12 社会に出てからよい仕事をし、多くの人に認められたい
	13 自分の志望する進路に進みたい
	14 何のために勉強するのだろうかといやになる
	15 ぼんやりと何も考えずに過ごしてしまうことが多い
	16 人の一生は結局偶然のことで決まると思う
Ⅱ 自己の対象化と統制	17 自分のよくないところを自分で考え直すように心掛けている
	18 自分の考えや行動を批判されても腹を立てない
	19 自分のよいところ悪いところがよく分かっている
	20 他の人から欠点を指摘されると自分でも考えてみようと思う
	21 できるだけ自分をおさえて他人に合わせようとする
	22 腹が立ってもひどいことを言ったりしないようにしている
	23 疲れているときは何もしたくない
	24 テレビをみてしまっ、勉強がやれないことがある
	25 ちょっといやなことがあるとすぐ不機嫌になってしまう
	26 いやになった時でも、もうちょっと頑張ろうとする
Ⅲ 自信・プライド・安定感	1 現在の自分に満足している
	2 自分に自信を持っている
	3 他人にばかにされるのは我慢できない
	4 自分がいやになることがある
	6 現在の自分が幸福だと思う
	7 今のままの自分ではいけないと思う
	27 私は何をやってもだめだと思う
	28 自分のことを恥づかしいと思う
	29 生まれ変わるとしたら、やはり今の自分に生まれ変わりたい
	30 自分にもいろいろと理えがあると思う

網掛け番号は逆転項目、「いいえ」の時に1点。

## 2. 調査内容

梶田が作成した30項目「自己教育力調査項目」を用いた(表1)。30項目のそれぞれの質問に対して、「はい」「いいえ」の二件法で回答してもらった。

## 3. 調査方法

調査は、各学年の1年次(10月)、基礎看護学実習Ⅰ終了後(1年次3月)、基礎看護学実習Ⅱ終了後(2年次10月)の3回行った。質問紙は無記名とした。

## 4. 分析方法

自己教育力に関する各質問項目は、「はい」を1点、「いいえ」を0点(逆転項目では逆の配点)として数量化した。各学年毎の合計点数の平均値はt検定を、質問項目の関連は $\chi^2$ 検定を行なった。次に3つの側面毎に算出した合計点数の平均値を、基礎看護学実習前後で各学年別に分散分析を行なった。

## 5. 倫理的配慮

調査用紙は無記名とし、学生へは研究の主旨と方法、データは研究以外の目的で使用しないこと、個人が特定されることはないことを説明した。また、研究への参加は自由であり拒否することもできること、協力の有無が成績に影響しないことを伝えた。これらの内容を調査用紙にも記入し、同意を得た上で調査を行った。

## Ⅲ. 結 果

調査対象者の数と属性を表2に示した。1999年入学生をA学年、2000年入学生をB学年、2001年入学生をC学年とした。有効回答数は、延べ898名(97.7%)であった。

本研究対象における自己教育力質問項目の信頼性の検討のためにクロンバックの $\alpha$ 係数を算出した。A・B・C学年全体のクロンバックの $\alpha$ 係数は0.66であった。また各学年毎のクロンバックの $\alpha$ 係数は、A学年0.53、B学年0.77、C学年0.60であった。

### 1. 自己教育力合計得点の学年別比較

各学年別の1年次10月(以下「実習前」とする)、1年次3月(以下「基礎Ⅰ実習後」とする)、2年次10月(以下「基礎Ⅱ実習後」とする)における自己教育力合計点の平均と標準偏差を表3に示した。A学年の自己教育力合計点の平均は、実習前は19.03(SD2.89)、基礎Ⅰ実習後20.46(SD3.33)、基礎Ⅱ実習後20.60(SD3.43)であり、実習前と比べて基礎Ⅰ実習後および基礎Ⅱ実習後は自己教育力合計点が有意に上昇していた。B学年では、実習前は20.47(SD3.14)、基礎Ⅰ実習後20.22(SD3.20)、基礎Ⅱ実習後19.76(SD3.11)となり、各実習終了後に合計点は若干低下しているが、実習前と比べて有意差はなかった。C学年では、実習前は20.58(SD3.38)、基礎Ⅰ実習後18.99(SD3.62)、基礎Ⅱ実習後19.59(SD2.84)となり、実習前と比べて各実習終了後の合計点は有意に低下していた。しかし、基礎Ⅰ実習後から基礎Ⅱ実習後にかけて合計点は若干上昇していた。

表2 対象者の数と属性

対象	調査時期		対象者数 名	回収数 名 (%)	有効回答数 名 (%)	平均年齢 歳(標準偏差)
A 学年	1 回目	1999年10月	108	105 (97. 2)	104 (99. 0)	19. 39 (2. 44)
	2 回目	2000年 3 月	108	107 (99. 1)	107 (100)	19. 71 (2. 50)
	3 回目	2000年10月	107	92 (86. 0)	89 (96. 7)	20. 52 (2. 61)
B 学年	1 回目	2000年10月	110	109 (99. 1)	106 (97. 2)	19. 21 (2. 46)
	2 回目	2001年 3 月	110	107 (97. 3)	100 (93. 5)	19. 68 (2. 72)
	3 回目	2001年10月	110	104 (94. 5)	104 (100)	20. 02 (1. 38)
C 学年	1 回目	2001年10月	110	106 (96. 4)	106 (100)	18. 74 (0. 73)
	2 回目	2002年 3 月	106	104 (98. 1)	99 (95. 2)	19. 12 (0. 63)
	3 回目	2002年10月	106	85 (80. 2)	83 (97. 6)	19. 82 (0. 62)
計			975	919 (94. 3)	897 (97. 7)	19. 56 (2. 06)

表3 自己教育力合計点の平均の比較

	実習前 平均 (SD)	基礎Ⅰ 実習後 平均 (SD)	基礎Ⅱ 実習後 平均 (SD)
A 学年	19.03 (2.89)	20.46 (3.33)	20.60 (3.43)
B 学年	20.47 (3.14)	20.22 (3.20)	19.76 (3.11)
C 学年	20.58 (3.38)	18.99 (3.62)	19.59 (2.84)

t 検定 \*  $p < 0.05$  \*\*  $p < 0.01$ 

## 2. 質問項目別による比較

学年別の実習前後における自己教育力調査項目の関連を調べるため  $\chi^2$  検定した結果を表4に示した。

A 学年において有意差 ( $p < 0.01$ ) があつた項目は、「4. 自分がいやになることがある」、「14. 何のために勉強するのだろうかといやになる」、「16. 人の一生は結局偶然のことで決まると思う」、「23. 疲れているときは何もしたくない」、「24. テレビをみてしまつて、勉強がやれないことがある」、「25. ちょっといやなことがあるとすぐ不機嫌になってしまう」、「27. 私は何をやってもだめだと思ふ」、「28. 自分のことを恥ずかしいと思ふ」であつた。B 学年では「4. 自分がいやになることがある」の項目のみに有意差 ( $p < 0.05$ ) があつた。C 学年において有意差 ( $p < 0.01$ ) があつた項目は、「4. 自分がいやになることがある」、「7. 今のままの

自分ではいけないと思ふ」、「14. 何のために勉強するのだろうかといやになる」、「16. 人の一生は結局偶然のことで決まると思う」、「24. テレビをみてしまつて、勉強がやれないことがある」、「27. 私は何をやってもだめだと思ふ」であつた。

基礎看護学実習において、実習前と有意差のあつた項目を梶田<sup>2)</sup>の3つの側面と照合すると、Ⅰ. 成長・発達への志向が2項目、Ⅱ. 自己の対象化と統制が3項目、Ⅳ. 自信・プライド・安定感に関するものが4項目含まれていた。

表4 実習前後における学年別の自己教育力項目の関連

項 目		A 学年		B 学年		C 学年	
		はい/いいえ(人)	有意確率はいいえ(人)	はい/いいえ(人)	有意確率はいいえ(人)	はい/いいえ(人)	有意確率はいいえ(人)
4. 自分がいやになることがある	実習前	78 / 26		93 / 13		92 / 14	
	基礎Ⅰ 後	19 / 88	**	76 / 24	*	14 / 85	**
	基礎Ⅱ 後	76 / 13		92 / 12		75 / 8	
7. 今のままの自分ではいけないと思ふ	実習前	82 / 22		91 / 15		92 / 14	
	基礎Ⅰ 後	92 / 15		88 / 12		12 / 87	**
	基礎Ⅱ 後	75 / 14		84 / 20		19 / 64	
14. 何のために勉強するのだろうかといやになる	実習前	25 / 79		76 / 30		75 / 31	
	基礎Ⅰ 後	68 / 39	**	65 / 35		68 / 31	**
	基礎Ⅱ 後	55 / 34		61 / 43		38 / 45	
16. 人の一生は偶然のことで決まると思う	実習前	27 / 77		77 / 29		76 / 30	
	基礎Ⅰ 後	80 / 27	**	74 / 26		79 / 20	**
	基礎Ⅱ 後	60 / 29		67 / 37		20 / 63	
23. 疲れているときは何もしたくない	実習前	74 / 30		16 / 90		11 / 95	
	基礎Ⅰ 後	19 / 88	**	12 / 88		10 / 89	
	基礎Ⅱ 後	11 / 78		9 / 95		8 / 75	
24. テレビをみてしまつて、勉強がやれないことがある	実習前	70 / 34		31 / 75		30 / 76	
	基礎Ⅰ 後	40 / 67	**	26 / 74		26 / 73	**
	基礎Ⅱ 後	36 / 53		24 / 80		59 / 24	
25. ちょっといやなことがあるとすぐ不機嫌になってしまう	実習前	28 / 76		60 / 46		57 / 49	
	基礎Ⅰ 後	79 / 28	**	51 / 49		51 / 48	
	基礎Ⅱ 後	56 / 33		50 / 54		38 / 45	
27. 私は何をやってもだめだと思ふ	実習前	13 / 91		83 / 23		76 / 30	
	基礎Ⅰ 後	87 / 20	**	80 / 20		68 / 31	**
	基礎Ⅱ 後	69 / 20		74 / 30		20 / 63	
28. 自分のことを恥ずかしいと思ふ	実習前	13 / 91		76 / 30		76 / 30	
	基礎Ⅰ 後	85 / 22	**	68 / 32		71 / 28	
	基礎Ⅱ 後	71 / 18		77 / 27		64 / 19	

 $\chi^2$  検定 \*  $p < 0.05$  \*\*  $p < 0.01$

## 2. 自己教育力の3つの側面による比較

自己教育力調査30項目を梶田による3つの側面における合計得点の平均を算出し分析を行なった。

A・B・C学年全体における基礎看護学実習前後の得点変化を表5に示した。実習前後において平均得点が高かったのは「成長・発達への志向」であり、最高8.16 (SD1.37) であった。また、平均得点が低かったのは「自信・プライド・安定感」であり、最低5.71 (SD 1.93) であった。実習前後における変化では、「成長・発達への志向」は基礎Ⅰ実習後に平均得点は高くなり、基礎Ⅱ実習後では実習前より低下した。

「自己の対象化と統制」では実習前に比べて実習後は若干低下したものの得点に変化はみられなかった。

「自信・プライド・安定感」においては、実習前と基礎Ⅰ実習後に比べて基礎Ⅱ実習後は、平均得点が高くなっており有意差 ( $p<0.01$ ) も認められた。

学年別による得点変化を表6・表7・表8に示した。A学年においては、実習前後の得点変化は「成長・発達への志向」と「自信・プライド・安定感」の2つの側面において有意差 ( $p<0.05$ ,  $p<0.01$ ) が認められた。

「成長・発達への志向」では、実習前に比べて基礎Ⅰ

実習後に平均得点は高くなり、基礎Ⅱ実習後に若干低下したものの実習前よりは高かった。「自信・プライド・安定感」では、実習前は4.87 (SD1.48) と平均得点としては最も低い得点であったが、実習が進行するとともに得点は高くなっていった。

B学年においては、実習前後の得点変化に有意差は認められなかった。しかし、「成長・発達への志向」と「自己の対象化と統制」の側面において実習前に比べて基礎Ⅰ実習後、基礎Ⅱ実習後と実習の進行とともに若干得点が低下傾向にあった。

C学年は、A学年同様「成長・発達への志向」と「自信・プライド・安定感」の2つの側面において有意差 ( $p<0.01$ ) が認められた。「成長・発達への志向」では、実習前に比べて基礎Ⅰ実習後、基礎Ⅱ実習後と得点は低下していた。「自信・プライド・安定感」は、基礎Ⅰ実習後は実習前に比べ得点が大きく低下し、基礎Ⅱ実習後に上昇したものの実習前よりは低くなっていった。有意な差は認められなかったが「自己の対象化と統制」の側面において、実習前に比べて基礎Ⅱ実習後に得点の上昇がみられた。

表5. 全学年における自己教育力の3側面の得点

	実習前 平均(SD)	基礎Ⅰ後 平均(SD)	基礎Ⅱ後 平均(SD)	F値	有意確率
I 成長・発達への志向	8.00(1.34)	8.16(1.37)	7.68(1.41)		
II 自己の対象化と統制	6.24(1.67)	6.04(1.74)	6.09(1.70)		
III 自信・プライド・安定感	5.79(1.83)	5.71(1.93)	6.21(1.80)	3.027	**

\*  $P<0.05$  \*\*  $P<0.01$ 

表6. A学年における自己教育力の3側面の得点

	実習前 平均(SD)	基礎Ⅰ後 平均(SD)	基礎Ⅱ後 平均(SD)	F値	有意確率
I 成長・発達への志向	7.45(1.26)	8.21(1.43)	7.98(1.38)	2.176	*
II 自己の対象化と統制	6.71(1.38)	6.42(1.67)	6.16(1.81)		
III 自信・プライド・安定感	4.87(1.48)	5.83(1.74)	6.46(1.83)	5.522	**

\*  $P<0.05$  \*\*  $P<0.01$

表7. B学年における自己教育力の3側面の得点

	実習前 平均(SD)	基礎Ⅰ後 平均(SD)	基礎Ⅱ後 平均(SD)	F値	有意確率
I 成長・発達への志向	8.18(1.35)	7.98(1.35)	7.65(1.54)		
Ⅱ 自己の対象化と統制	6.03(1.83)	5.87(1.81)	5.76(1.68)		
Ⅲ 自信・プライド・安定感	6.26(1.62)	6.37(1.50)	6.36(1.82)		

表8. C学年における自己教育力の3側面の得点

	実習前 平均(SD)	基礎Ⅰ後 平均(SD)	基礎Ⅱ後 平均(SD)	F値	有意確率
I 成長・発達への志向	8.35(1.24)	8.28(1.31)	7.41(1.22)	5.093	**
Ⅱ 自己の対象化と統制	5.99(1.69)	5.81(1.71)	6.43(1.55)		
Ⅲ 自信・プライド・安定感	6.24(1.99)	4.90(2.22)	5.75(1.67)	3.582	**

\* P&lt;0.05 \*\* P&lt;0.01

#### IV. 考 察

##### 1. 基礎看護学実習前後の自己教育力の変化

基礎看護学実習前後の自己教育力は、各学年によってその変化が異なっていた。A学年では、基礎看護学実習を体験するにともなって自己教育力が有意に高くなり、反対に、C学年では、実習前に比べて、実習後は自己教育力が有意に低下していた。また、B学年においては、有意な差はなかったが低下傾向にあった。

N看護大学における基礎看護学実習は、1年次後期から2年次前期に実施され、看護専門職としての基礎的な知識・技術・態度を実際の体験を通して学ぶことが実習のねらいである。実習においては、既習した知識と技術を使って自主的に学ぶことが必要とされる。つまり実習は、自己教育力が育まれる科目であり、さらに自己教育力を高める機会でもある。そのため、実習によって自己教育力は高くなることが予想された。しかし、今回の結果からは、3つの学年の中で、実習後に自己教育力が高くなったのは、A学年だけであった。基礎看護学実習後の自己教育力を調査した加藤ら<sup>13)</sup>によると、実習後の平均値は実習前をやや上回っ

たが有意差は認められなかったという結果であった。この報告は一学年を対象としたものであり、今回の結果からは、学年によっては有意差を認めることが明らかになった。また、森ら<sup>14)</sup>は、看護学生は臨床実習などにより自己を振り替える機会が多いためか、一年一年急速に変化すると述べているが、変化しない学年もあった。さらに、岩永<sup>15)</sup>の学年間の比較からは、看護大学生の自己教育力は学年が上がるに従って高くなっているとはいえないという結果と同じであった。

項目別には、梶田の3つの側面の中で「自信・プライド・安定感」の項目に多く差がみられた。これは、初めての实習では、患者という対象を通して対人関係を学び、他者を通して自己を見つめる機会にもなるためと言える。A学年は、実習前と比べて「27. 私は何をやってもだめだと思う(逆転項目)」と「28. 自分のことを恥ずかしいと思う(逆転項目)」で平均点が上昇していることから、実習を通して自分への自信やプライドの形成につながり、C学年は反対に「27. 私は何をやってもだめだと思う(逆転項目)」は平均点が低下していることから、自信を喪失する傾向になったと考えら

れる。加藤ら<sup>16)</sup>は、自己認識や自尊感情については、学修者が結果を肯定的にとらえれば自信や興味・関心が高まり意欲がさらに向上する。しかし、否定的にとらえれば自身を喪失し、向上しようとする意欲もなくなかねないと述べている。このような学生の自己認識や自尊感情の違いによって、自己教育力の変化に差がみられたと考えられる。従って、梶田のいう「自信・プライド・安定感」は自己認識や自尊感情といった自ら学ぶ意欲や主体的に変化に対応するために必要な心理的基盤であり、自己教育力の育成に重要な側面であることが確認された。

このように自己教育力を構成する3つの側面からの分析によって、さらに実習前後における変化が明らかになると考え、自己教育力調査30項目を3つの側面から検討した。

## 2. 自己教育力の3つの側面からみる実習前後の変化

学年全体では、実習前後の平均得点において「成長・発達への志向」が最も高く、「自信・プライド・安定感」が低い傾向にあった。これは先行研究<sup>17)18)</sup>とも一致する看護学生の特徴である。看護専門職を目指して大学に入学し、看護の基本を学ぶことで自己の目標を意識し、自己成長への期待が大きくなる結果といえる。基礎Ⅰ実習後においても高い得点を維持していたことは、初めての实習体験が自己成長や目標達成のために効果的であったことが推測される。基礎Ⅱ実習後では得点が低下したが、学習が進み実習期間が長くなると看護者として求められることも多くなり、学習上の困難さなどから目標を見失うことも考えられる。今後の領域別実習における得点の変化が予測される。「自信・プライド・安定感」が低いことから、高校生の時とは異なる友人関係や教員との人間関係、さらには実習における年齢層の広い患者との関係作りと看護師との関係の中で、自信やプライドを揺さぶられながら自己成長を模索する状況が推測される。また、この時期は特に青年期の自己同一性という発達課題も抱えていることも影響していると考えられる。そのような中でも健康障害をもった患者に向き合わなければならない現実が不安や葛藤を生み、この側面に変化をもたらしていると考えられる。「自己の対象化と統制」は他の2つの側面に比べ、得点は中位であり、変化が少なかった。

実習前からの自己認識や自己評価が実習によって大きく変化することがなかったことを表していると考えられる。自信やプライドが揺さぶられ、不安定になっても自己認識や評価にあまり影響がなく、自己洞察までには至っていないのかもしれない。実習という学習や体験が学生自身にとって適正な自己認識と自己評価に結びついているのかという確認も必要である。実習によって、自分自身の現状と可能性、課題を認識するような働きかけが自己教育力を高めるために必要と考える。

学年別にみると、側面の平均得点と実習前後における変化には、異なる特徴がみられた。A学年は実習前における「成長・発達への志向」と「自信・プライド・安定感」が3つの学年中もっとも低かった。N看護大学の1期生であるため、上級生が不在の中で身近な役割モデルがなく、学習目標を設定し難かったことが推測される。さらに学生生活の基盤づくりが求められ友人関係、教員との関係性が自信やプライドに影響を与えたものと思われる。しかし、その後の得点の上昇は大きく、1期生であることの自覚と責任を芽生えさせ、自己教育力の上昇になったと推察できる。

B学年は、実習の前後で自己教育力合計得点の変化がなかった。また、3つの側面からも有意差のあった変化はみられなく、A学年やC学年に比べて実習による自己教育力の影響が少ない学年といえる。上級生の存在による安心感、事前に情報を得て準備できる状況にあることが自主的な行動や意欲をやや停滞させてしまうことが推察できる。

C学年は、実習前後における得点が「成長・発達への志向」と「自信・プライド・安定感」において有意に差があった。この2つの側面は実習が進行するに伴い得点は低下していた。特に基礎Ⅰ実習後における「自信・プライド・安定感」の低下率は大きく、特徴的である。初めての実習体験が自信やプライドを低下させそれが自己教育力の低下に関与していると考えられる。

## 3. 教育への活用と研究の限界

本研究により、自己教育力調査は学生の自己教育力という「力」を知り、さらには、学年の特徴を把握する手がかりとなりえることがわかった。学年によって自己教育力には差があり、教育は学年の特徴をふまえ

て行う必要がある。具体的には学年による自己教育力の特徴を知り、実習指導場面や実習後の面接時等において、学生自身が適正な自己認識の下に適切な自尊感情を持ち、正しく自己評価ができるように働きかけることが重要である。社会の変化に伴い、多様で複雑な状況に対応できる力を限られたカリキュラムの中で教育することは難しい。それまでに培われてきた学習基盤の上に、学生個人に潜在する自己教育力を高める教育を実施することが生涯学習の基礎的能力としての自己教育力の育成につながると考える。

先行研究により、自己教育力に影響する要因にはいくつかが報告されている。従って、今回の結果からは、自己教育力の変化が実習の影響のみとはいえず、限界がある。また、質問項目の信頼性がやや低かったため尺度の信頼性確保に問題が残る。

今後は、さらに学年が進行することでの自己教育力の変化を追跡するとともに、実習に関しての学生個人の体験や満足感と自己教育力の関連を含めて検討する必要がある。

## V. まとめ

N看護大学のA・B・C学年を対象に、基礎看護学実習前後の自己教育力を、梶田の「自己教育力調査項目」を用いて調査した。その結果以下のことが明らかになった。

1. 基礎看護学実習前後における自己教育力は、学年によってその変化は異なった。
2. 実習後に差のあった項目では、梶田の3つの側面から「自信・プライド・安定感」に関する項目が多かった。
3. 自己教育力の3つの側面からは、「成長・発達への志向」が高く、「自信・プライド・安定感」が低い傾向にあり、看護学生の特徴を表していた。実習前後の変化では「自信・プライド・安定感」の側面に有意差が認められた。また、得点変化は、学年別に異なる特徴がみられた。
4. 自己教育力を高めるためには、学年別の特徴を把握し、学生の潜在能力を引き出す働きかけが必要であることが示唆された。

## 謝 辞

本調査に関して、在学中、数回にわたり快く協力して下さった卒業生の皆様に深く感謝いたします。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省医政局看護課：新たな看護のあり方に関する検討会報告書、看護教育、44 (5), 361-366, 2003.
- 2) 稲川三郎：自己教育力を育てる指導の実践、黎明書房、70, 1987.
- 3) 梶田叡一：自己教育への教育、明治図書、50-53, 1985.
- 4) 加藤千代世、吉田喜久代他：看護学教育における自己教育力の構造と課題、Quality Nursing Vol.10 no.1, 67-72, 2004.
- 5) 酒井明子：自己教育力に関する文献学的考察、Quality Nursing Vol.9 no.12, 56-64, 2003.
- 6) 森千鶴、佐藤みつ子他：看護短期大学学生の自己教育力に関する研究—学年別にみた自己教育力に関するアンケートの所見—、日本看護研究学会雑誌Vol.15 No.4, 24-35, 1992.
- 7) 岩永秀子：看護学生の自己教育力—4年制大学生と看護専門学校生の比較、Quality Nursing Vol.2 no.11, 49-56, 1996.
- 8) 岩永秀子、山本昇：看護学生の自己教育力に及ぼす看護イメージの影響、日本看護学教育学会誌、Vol.7 No.3, 17-28, 1997.
- 9) 佐藤みつ子、森千鶴他：看護学生の「自己教育力」に關与する要因について、第22回看護教育、201-203, 1991.
- 10) 森千鶴、佐藤みつ子他：看護学生と自己教育力、日本看護研究学会雑誌、Vol.17 No.3, 80-81, 1994.
- 11) 森千鶴、佐藤みつ子他：看護学生における自己教育力に関する研究—自己教育力と学習方法などとの関連—、日本看護研究学会雑誌、Vol.16 No.2, 69, 1993.
- 12) 前掲書<sup>5)</sup> 61.
- 13) 加藤直子、堀裕美他：基礎看護学実習Ⅱ終了時における自己教育力、秋田県看護教育研究会誌29号、17-22, 2004.

- 14) 前掲書<sup>6)</sup> 34.
- 15) 前掲書<sup>7)</sup> 55.
- 16) 前掲書<sup>4)</sup> 69.
- 17) 我妻幸子：臨地実習における臨床指導者のソーシャルサポートと看護学生の自己教育力の関連についての研究、神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録28、73－78、2003.
- 18) 中本啓子、西川しづえ、新實夕香里：初めての臨地実習における自己教育性の変化と授業過程評価との関係、日本看護研究学会雑誌26 (3)、423、2003.